震災 絆の大切さ鮮明に

東達障れ家災
ら す震

震災の被害を受けて、文部科学省の検討会は学校施設の在り方を議論。緊急提

した。

アン
旅一おも
岩手県
利フ子
宮城県
ス難一外連
福島県

●●●宮城 特別支援学級

地域に見守られて育つ

大きな揺れに見舞われたのは、自宅近くの小学校にいた時だ。宮城県石巻市の浅野雅子さん(42)は、知的障害を伴う自閉症で特別支援学級に通っていた長男敬志君(13)を迎えに行っていた。

薬を取りに一度帰宅。非常時でもいつも通りきちんと靴を脱ぐ息子に大声を上げてしまう。避難所の中学校に急いだ。

敬志君は環境の変化が苦手。3日過ごした教室では片隅で身をすぼめ、ずっと横になっていた。登米市にある夫の実家に移っても安心できる布団にもぐったままだった。

食料不足の中、親戚は気を使ってくれたが、偏食気味の敬志君はあまり食べない。

「わがまま言えないんだから」。いら立ち、不安が募る。言葉を理解しづらい敬志君の腕を思わずつねったことも。「誰も悪くないのに。つねっても何も変わらないのに」と涙が出た。

数日後、浅野さんは自分だけ自宅に戻り、片付けを始めた。好きなおもちゃやスケッチブックに囲まれ、笑う息子の姿を見たい一心だった。

安否確認に訪れた担任教諭は「教室には敬ちゃんの好きなおもちゃがあるよ」と学校に来るよう勧めた。元担任は「食べられなくて困るだろう」と、好きなお菓子を残していた。

「理解してくれる先生が目の前にいる。私も救われた」

敬志君も自宅に戻り、卒業式を迎えた。頑張る一家を心配し、見守る周囲の人は増えていった。

「この地域で育てて良かった。この学校で良かった」。卒業証書を受け取る敬志君を見て、浅野さんは思った。

重度の知的障害がある自閉症の長男(21)がいる仙台市の高橋みかわさん(48)にも支えられた。普段から子どもの存在を知ってもらうのが大事。日常の在り方が非常時の支えになる」と話す高橋さんは「『つらかった』で終わらせず次に伝えたい」と、自分や浅野さんら親たちの体験を「大震災 自閉っこ家族のサバイバル」（ぶどう社刊）にまとめた。

敬志君が今春から通う県立石巻支援学校は児童生徒4人が犠牲になった。住民は学校に次々避難。介護が要る高齢者約20人を含む80人以上が避難していた時もあった。

教職員は近所の人の食料支援や他校の協力を得て避難所も運営しつつ、5月12日の始業式と入学式にこぎ着けた。震災後、眠れなかったり自分の頭をたたいたりする子が増えた。体重が10キロ減った女子もいたが、学校が始まると元気になった。

「学校がいかに子どもの支えになっているか、あらためて重みを感じた」と話す桜田博校長(57)は、地域の理解の重要性も再認識させられた。

「震災で手を差し伸べてくれた地域の人に元気な子どもの姿を見せるのが感謝のメッセージだ」

震災後に戻った自宅で、手回しでライトを充電する浅野敬志君（左）と母雅子さん＝3月21日、宮城県石巻市

●●●福島 児童デイサービス

避難した母の孤立防ぐ

部屋中に広げたおもちゃで遊ぶ子どもの笑いが響く。「来て良かった。震災の前と同じ顔している」。見守る母親(30)がうれしそうに話した。

福島県会津若松市。2断建て住宅に児童デイサービス「はまっ子くらぶ」がある。

原発事故で避難した障害児を地元の福祉施設だけでは受け入れきれず、8月に開所した。幼児や小学生ら約10人が運動や工作をし、遊ぶ。

福島県が事業主体で、全国児童発達支援協議会に運営を委託、無料で使える。現地スタッフに加え協議会加盟施設が交代で職員を派遣している。

妊娠中だった母親は長男(3)と次男(2)とともに、双葉町から避難。原発から3キロ余りの自宅には戻れず、4月に三男を出産。5月に猪苗代町のホテルへ。長男は余震におびえ、言葉の遅れがある次男は自閉症の傾向と診断された。

見知らぬ土地で不安な中、紹介されたのが「はまっ子くらぶ」。次男へのアドバイスを受け母親は「気が楽になった」。

大熊町から会津坂下町の実家に避難した別の母親(43)は、ダウン症の次男(7)が利用する。

大熊町では隣町の施設に通っていた。「伸びる所は伸ばしたい。今までやったことを途絶えさせたくなかった。ここなら安心できる」と話す。

現地スタッフの中村容子さん(27)は「知らない場所で親は環境の変化に戸惑う。子どもはいっぱい遊んでストレスを発散してほしい」と話す。

県の相談支援アドバイザー青柳百合子さん(50)によると、避難所で子どもが騒いだり体調を崩したりしても、相談先が分からず悩む保護者がいた。仮設住宅でも迷惑を心配し、アパートを探して出て行く人もいる。

青柳さんは「避難先を転々とし、地域のコミュニティーから外れてしまう」と孤立を心配する。「『はまっ子くらぶ』などで、一人じゃないことを伝えたい」と話す。

ただ「はまっ子くらぶ」は来年3月まで。避難生活の見通しは立たない。「残る人、去る人、双方を支援する場所をどれだけつくれるかが課題」と青柳さんは指摘した。

問題が起きることもある。時間の経過にあわせて息の長い支援が必要」と話している。

「指示は短く」など具体的な文章を引くよう声がけをする」などの回答も寄せられた。

「はまっ子くらぶ」で過ごす男の子（中央）＝9月5日、福島県会津若松市